アリスのカメラ

じっさい、作品を金銭に換えることが出来るプロ以外にとって、カメラは単なる「空想」の道具でしかありえない。撮影した結果は、いつだって白々しいものに決まっている。古いアルバムは、いたずらに変色するにまかされ、めったに開かれる事もない。いったい何を期待して、あの時シャッターを切ったのか、思い出すことさえもう不可能だ。写真を残すつもりで、実は結果の存在しない行為に酔っているのだと気づいたとき、人はカメラを捨て去ろうと決心する。むろんカメラと一緒に、シャッターを押す瞬間の、あの無償の期待も捨て去ってしまうわけだ。

ただ、結果が存在しないことを承知で、しかも期待を失わずにいられる空想家も少なからずいて、それがカメラ好きになってくれるわけである。彼等の願望は、シャッターを押すだけで満たされるから、結果にはそうこだわらない。極端な場合には、シャッターを押すことさえ、空想ですませてしまうことがある。そんなことなら、レンズのない偽カメラでも良さそうなものだが、そこがマニアのマニアたるゆえんなのだ。写せば予想通りに（あるいは理想どおりに）写るという保証があればこそ、空想を満たすことも可能なのである。

視点を変えて、いささか違った見方をすることも出来る。カメラ好きが、カメラほどにはフィルムに関心を示さないのは、あんがい撮影したものが現実には存在しないせいかもしれないのだ。カメラが本来持っているはずの、現実指向を逆手にとり、結果を無視することで、現実を拒絶しようとしているのかもしれないのである。そうなるとカメラは存在しないもののシンボルになる。あるいは、現実のネガになる。

『不思議の国のアリス』の作者、ルイス・キャロルが、晩年カメラに凝りだし、それももっぱら少女の写真に熱中して、周囲をはらはらさせたという記事を読み、ひどく落ち着かない気分にさせられたことがある。ぼくはまだ、そんなふうにアリスを読んだことがなかった。作者が、アリスにそんな感情を抱いていたなどとは、想像もしていな

かったのだ。つまりあの小説は、それなりに一種の恋愛小説だったことになる。現実の女性のかわりに、存在しない少女を愛してしまったのだ。そして、たぶん、存在しない少女のポートレートのために、カメラ好きになってしまったのだろう。

シャッターを押しつづけてさえいれば、いつかアリスが写っているかもしれないという幻想。不可能にかけた、一瞬の緊張。それは、現実の拒絶であり、部分への解体の願望でもあるだろう。だが、アリスと出会えるのは、不思議の国の中でしかない。脱出を夢見すぎた者は、いずれ夢の中へと脱出していくしかないのである。（一〇九三字、引用にあたって一部表現と表記を改めた）

安部公房『笑う月』（新潮社、昭和五十年）より